

第二部 シンポジウム

知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み～生涯学習を通じた社会貢献～

コーディネーター：清國祐二（香川大学生涯学習教育研究センター長）

それでは、後半のシンポジウムを始めます。今回のテーマは「知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み」といたしました。

高度情報社会の実現により、「知識」はさまざまなメディアを通して私たちの手元に届く時代です。私たち大学の認識がかつと変わらなければ、社会から取り残されてしまうほど、社会における知の位置づけが変わってしまいました。象牙の塔に囲い込まれていた「知」から、大衆に溢れる「知」への変貌です。

そこで、このシンポジウムは、社会に存在する大学の意味をそれぞれの立場からご発言いただき、生涯学習を通じた社会貢献について深めていこうと思います。ややもすると現象に翻弄されがちな現代社会に抗う意味でも、あるべき姿を論じることで、ここでの議論が生涯学習教育研究センターの今後の方向を示唆するものとなることを願っています。

そのために、本日はシンポジスト3名にご登壇いただいております。短時間のシンポジウムで大変恐縮ではございますが、小気味よい展開で議論が深まるよう、力不足ではございますが務めていきたいと思えます。それでは、私に近い方から、順にご紹介いたします。

まず最初は、金沢大学地域連携推進センターの浅野秀重教授です。金沢大学は香川大学より一足早く「大学教育開放センター」が設置された、老舗の大学です。歴史や文化の薫り高き金沢の地で、地域に根ざした活動をされてきました。

次に、香川大学教育担当理事・副学長の阿部文雄理事です。開会の挨拶の中にもございましたが、現在、生涯学習教育研究センターの所属する教育・学生支援機構長として、学生教育のみならず、香川大学の社会貢献のあり方についても構想されています。

そのお隣が、先ほどご講演をいただきました、香川大学名誉教授の稲富健一郎先生です。会場のみなさまにはご紹介するまでもない、香川大学公開講座の代名詞的存在の先生です。

先生方、本日はどうぞよろしくお願いたします。

申し遅れましたが、私コーディネーターを担当いたします、香川大学生涯学習教育研究センター長の清國祐二と申します。会場のみなさま、どうぞよろしくお願いたします。

それでは、時間の関係もございますので、早速それぞれのお立場から、大学の地域貢献や生涯学習推進につきまして、現在感じておられます現状と課題についてご発言お願いたします。

まずは、金沢大学の浅野先生、よろしくお願いたします。

浅野秀重（金沢大学地域連携推進センター教授）

会場の皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました金沢大学地域連携推進センターの浅野です。

香川大学生涯学習教育研究センター30周年おめでとうございます。記念シンポジウムに参加をさせていただきありがたく思っています。本日お伺いする機会を得たことで、午前中、琴電にゆられながら栗林公園へ向かい、園内を散策させていただくことができました。手入れの行き届いた緑と公園そのものの美しさの中に身を置き、金沢の兼六園とは違う雰囲気の中でしばし時の経過を忘れ、ゆったりした気分を味わいました。

さて、さきほどの山本先生のプレゼンテーションでも金沢大学のことをお取り上げいただきましたが、香川大学さんとほぼ同じ時期に大学の教育と研究の成果を広く地域社会に開放するという役割を負って、私たちのセンターは1976（昭和51）年発足いたしました。開設公開講座数は、14講座、受講者は781人でしたが、センター発足時の記録によると、「大学教育開放センターは、日本の大学史におけるパイオニアとしての重大な役割を果たすために、市民とともに、着実な歩みを進めたい」と記されているように、大学と地域社会とを結ぶ機関としての歩みを始めたこととなります。

ところで、金沢大学が推進している社会教育・生涯学習関連事業で最も特徴的なものは、金沢大学社会教育研究振興会という組織です。この組織は、県及び市町村並びに社会教育関連団体等、そして金沢大学とで構成する社会教育関係団体で、県及び市町の出捐（補助金又は負担金）を原資として事業展開するもので、私たちのセンターは、その事務局をあずかっています。この振興会の主たる事業は、お配りした資料の裏面、センターの主な事業の（2）で紹介しておりますが、金沢大学市町（村）共催講座というものです。これは、県や市町等が講座や学級を企画する際、助言を行ったり、その講座や学級に金沢大学の先生方が講師となって出向き市町村の公民館等で講義をしていただくというもので、この事業そのものは、昭和51年以来平成19年度末までに1,386講座開講し、59,584人の方に受講していただいています。市町村合併により開催する市町村数や開設講座数は減少しましたが、地域における学習機会の提供に大きく貢献しているものと受け止めています。

私は、学びの活動は、「昨日と違う今日の自分、今日と違う明日の自分づくりの営み」として捉えています。さきほどの稲富先生の「シェイクスピアとともに歩む」と題するお話をお聴きしながら、先生の講座は、単なる教養講座ではなく、知を私たち一人ひとりの現実の生活と結びつけながら、ヒトとしてどうあるべきかを考える機会となるようなことを意図して展開されているという印象を持ちました。そうした意図を持つ講座、学びの機会が、新しい自分づくり、自己発見につながるような気がいたしますし、そうした地道な取組が、言われるところの知識基盤社会づくり、人間力の形成にも寄与するのではないかと思います。このあたりで最初の発言といたします。

阿部文雄（香川大学教育・学生支援機構長）

私は先ほどの清國先生のご紹介にありましたように、生涯学習に関する専門家ではありませんので最初にお断りしておきたいと思えます。香川大学として生涯学習なり社会貢献なりに、どういう戦略なり方向性を持っているかという観点から発言していきたいと思えます。

先ほど申し上げましたようにこの社会貢献は、教育基本法の改正で2年ほど前に大学の第3の機能ということで明確に位置付けられました。大学は教育、研究、そして社会貢献を、あるいは地域貢献を目的にすることが明確にされました。そして本年の政府の方針として、生涯学習社会を目指すという方向が出て、いわば外的に大学の外から生涯学習なり社会貢献、地域貢献というものに力を入れていくんだという基本的な方向性が出されております。

香川大学は、それを受けてこの生涯学習なり、地域貢献を積極的に推進していくことに決めておりますけれども、今、申し上げました外的な要因に対して内的な要因というものもござります。

一例を挙げますと、平成11年に香川大学は初めてですけれども外部評価を行いました。大学全体を自己評価するということなんですね。その報告書を見ますと、4つの視点から大学を評価したいと言っております。1つは地域性、2番目が拠点性、そして学際性、国際性という4つの視点から自己評価をするというアプローチがなされました。

結論としては、今後、香川大学は個性化をしていく、国立大学の中で大学独自の香川大学ならではの個性化をしていく、これが求められているんですけども、その方向として4つの視点の中で最も有望なものは、拠点性と地域性ではないかということが結論付けられております。香川大学は10年ぐらい前に明確にそういう自覚をしながら、香川県における拠点、四国の中の拠点、それから四国なり、瀬戸内海なり、香川なり、こういった地域を大事にしていく、そういうことが有効ではないかと、大学として重要じゃないかということが明確になって、それ以降こういう方向性を基に、実は昨年4月に香川大学憲章というものを策定しました。そこでも知の拠点としての総合大学と言っています。

その地域貢献の中で生涯学習を位置付けて、積極的にやっていくんだと。その中で香川大学としての存在感というものを発揮していきたいというようなことを自覚しまして、今後とも地域貢献、生涯学習に力を入れていくという方向でやっていると思います。

大学は学びたいときにいつでもどこでも学べる体制が必要になる、これを国が保障する。その受け皿として香川の地では香川大学が、その拠点として正規学生以外のすべての方に、生涯学習の機会を与えたいということを積極的に推進していく、そういう方向性を持っておりますことをまず申し上げておきたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございます。先ほど稲富先生には、まとまった時間でお話しいただいたんですが、それに関わることにもなろうかと思えます。四半世紀支えて下さった先生から、過去を振り返った上で未来の展望を一言いただきたいと思えます。どうぞよろしくお願いします。

稲富健一郎（香川大学名誉教授）

どうも長いことしゃべり過ぎましたので、ここではあまりしゃべりたくないんですけど。今、浅野先生から補足していただきましたように、知が知で終わらないで行動へと移行する、それが大切なんじゃないかなと思っています。知るということに関して、例えばクイズ的にいろいろなことをたくさん知ということも必要なかもしれないけど、そうじゃなくて、一人一人の生き方に関わってくる、一人一人がそのこと（知）によって、より充実した人生が送れるようになると、そういう知の摂取の仕方というか、その知が行動に、あるいはその人の人格にまで影響するような、そういう体験ができる知であるのが望ましいのではないかと考えております。

それで、またロンドンの話になりますけれども、ロンドン大学でも、モーリー・コレッジもそうですが、あらゆる種類のアルコールが置いてありまして、いつでもそれを楽しめる。それは日本のキャンパスではだめなんですかね。ぜひそれを実現していただいて、あらゆる種類のアルコールが飲めて、お茶も飲めて、のんびりとお話ができるような雰囲気、環境を作っていただけたらありがたいかな。それには予算が要りますのでやっぱりお金が要りますね。

コーディネーター

ありがとうございました。幸い本日は阿部副学長がいらっしゃいますので、経営的な視点から後ほどご発言もいただけるものと思えます。確かにイギリスなどは大学内にパブが複数あったりして、そこでアルコールを飲みながら会話を楽しむ習慣があることを思い出します。好きな人にはいいんですが、嫌いな人にはあまり喜ばれないかもしれませんね。

さて、先ほど阿部先生からお話をいただきました、大学として地域と関わり、貢献していくという視点ですね。大学がいくら頑張っても、地域が受け入れてくれないと意味がありません。その点、本日ご参加いただいている香川県教育委員会、高松市教育委員会、高松市市民政策部の方々をここから拝見するにつけ、まさに香川大学が香川県や高松市から大きな期待を受けていることを実感します。相互に歩調を合わせながら、県民や市民の幸福を実現させるべく、強調していることを再確認しているところです。

また香川大学の公開講座に毎年のようにご参加いただいて、それこそ変容というんですか、学びの中で皆様方がいつでも成長していただける。先ほどの行動や行為との合一というのがありました、社会をよくするために大学の知が活用される、それを支えてくださっている受講生の方々にも大いに感謝しております。

ですから私たちもそれに見合う努力といたしますか、その期待に応えるべく、30年の節目に立ち、日々精進していかなければならないと思いを新たにしております。少し話を戻しますが、今回のテーマは知の循環型社会としていて、テーマ的には少し難しくはなっていますが、この地域と大学を結ぶ新たな展望というか展開というか、そういうものも大学の中では起こっています。そのあたりを阿部先生にお願いします。

阿部

先ほど香川大学は、生涯学習とか地域貢献に積極的に関わっていきたいという希望を申し上げましたけども、では具体的にどうするのかと、どういうコンテンツがあるのかということがまさに問題でございます。正規学生以外の社会人等に対してこれまで香川大学は、さまざまな教育プログラムを提供してきております。例えば公開講座といいますと、私は専門家ではありませんが、やはりこの稲富先生のシェイクスピアを見たらそれが面白い、あるいは大変聴きたいという、そういうところで皆さんが聴かれると思うんですけども、もっと多様ないろいろな講義の組み合わせといたしますか、単なる教室だけではなくて、フィールドワークも含めて、さまざまな多様なコンテンツで、教育プログラムを提供するというのもあるんじゃないかなと思います。例えば徳島大学ではホノルルマラソンに参加しようというような公開講座で、実際にかなりの方が参加するとか、あるいはお遍路さんを一緒に体験しようというようなプログラムとかをやっております。

実は今、シニアカレッジというのをやっているんですけども、今週の月曜日から明日の金曜日まで90分の講義が12回あって、月曜日の入学式の模様が瀬戸内海放送で少し放映されたそうなんですけれども、その後、少しまとまったものが来週放映されると聞いているので、ちょっと楽しみにしています。これは12の講義を香川大学の6つの学部のいろいろな先生たちを集めて4つのテーマで行います。讃岐うどん、お遍路さん、瀬戸内の島々、それから4番目として香川大学ならではの講義というふうに4つのテーマ性を持って、12の講義全体を聴いていただくというものです。初日からすごく盛り上がってきております。

参加していただいたのは、実は残念ながら県外の人ばかりで18人応募がありまして、北は北海道、それから福島、東京、神奈川、大阪、それから福岡からも参加されています。シニアカレッジですので50歳以上の方ですね。一番年長は69歳で、最も若い方が51歳なんですけれども、この方たちになんていうことでこういうプログラムに参加したのかということをお尋ねしますと知的な欲求があるということ。それから観光も楽しみにしている、グルメとか観光とかですね。それと、やはり3番目は交流なんです。いろいろな方がそのことについて自覚しておりますので、もう初日からすごく打ち解けて、どんどん交流しています。

最初のウェルカムパーティーのときに、同窓会をやろうということが大きな話題になるような形でやっています。いろいろな地域から来た方々が、この香川というところで交流をするわけです。それは集まった方同士もありますし、香川の私たち教職員とかいろいろな方々との交流、そういうことを楽しみに参加しているということが分かりました。これは私は個人的には非常に有望じゃないかと思っております、いろいろなパッケージで教育プログラムを提供するということですよ。

ただ残念ながら今のところ大学としては赤字でして、来年以降続けられるかどうか分からないんです。もう少し参加者が多くないときついかなど思っているところでございます。こういうまったく試行錯誤で始めていることなんですけれども、いろいろな形の教育プログラムを提供して、それにあらゆるところから参加していただくという展開も、生涯学習としてはあるんじゃないかなと思っております。それからちょっと長くなって恐縮ですが、いろいろな試みの一つとして、四国の国立大学が5つあるんですけれども、連携して何かいろいろなことをしませんかということが、今、起こっております。

香川大学が主幹大学になって大学間連携ということで、手法としてはeラーニングというものを使って、四国学という内容で70科目ぐらい提供します。7つの大学が参加しているんですけども、それぞれ10個ずつ面白い講義を出して、それをeラーニングで見られるというふうにするわけです。これは主として正規学生に対して単位を与えるという形で、四国の面白さをコンテンツにした大学間連携をやろうというようなこともしております。

香川大学では、独自に讃岐学というものをいろいろな講師の方に協力していただいて、一つの固まった2単位物として作ろうとしています。地域を素材にしたり、地域の人や歴史や文化やさまざまなものをコンテンツにした新しい教育プログラムとか、新しい教育手法なんかを展開していきたいと。できれば香川県に在住の多くの社会人の皆さんが、興味を持って参加していただくことができればというふうに、具体的な一例としてはそういうものを考えております。

コーディネーター

ありがとうございます。まず第1点目はシニアカレッジの例からもその交流が大切だということです。ぜひパブもご検討いただきたいということと、香川大学も新しい取り組みを今年だけでもたくさん実施しています。全国的な流れでもありますので、金沢大学でも同様の取り組みをされているように思いますので、今後の方向性も含めて浅野先生からお願いします。

浅野

お配りした資料をまたご覧ください。香川大学さんと同様に発足した金沢大学大学教育開放センターは、4月から社会貢献室と組織統合して、センター名が地域連携推進センターとなりました。

金沢大学は、これまでは8学部体制であったのですが、この4月から3学域16学類というように再編成されました。教育学部は学校教育学類に、法学部は法学類にという形です。それと同様に我がセンターも改めて、人と人、人と地域、地域と地域を結ぶ、そういうような役割を果たしたいという願いを込めた地域連携推進センターとして新たなスタートを開始しました。資料の冒頭に、金沢大学憲章を一部掲げましたが、金沢大学は21世紀を切り拓き、世界の平和と人類の持続的な発展に資するとの認識に立って、自らを「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」として位置づけ、地域連携推進センターは、大学の持っている人的・物的資源を生かすこと、地域社会と連携しながら地域再生に積極的に参画すること、これらの活動を通じて大学自体の教育研究の活性化に寄与することを目的としています。

具体的な事業としては、資料の裏面をご覧ください。先ほどふれた、金沢大学社会教育研究振興会ですが、現在、どこの自治体も、もちろん社会教育・生涯学習振興行政の部局も事業予算は厳しく、スクラップせざるをえない事業も場合によっては出てきます。そうした事業を見直し、新たな形態や方法でさらに発展させる意図で県や県生涯学習センター、そして私たちのセンターが協力・協働し合って取り組んでいる事業として、(2)の市町村共催講座の他に(4)の生涯学習・社会教育等担当者研修、そして(5)の生涯学習振興県民フォーラムがあります。残念ながら県がスクラップあるいは縮小せざるをえなくなってしまった事業を、補助金を受けている団体が新たな取り組みをすることで県や市などの自治体に成果を少しでも還元できるように、知の循環という言葉がありますが、いわば財源の循環と言いうような形で推進しています。市や町の講座や事業に金沢大学の先生方が関わることによって金沢大学と地域がさらにつながり合うことができるよう努めたいところです。

そういう点におきましても、24年間シェイクスピアの講座を引き受けてくださっている稲富先生のような方は、貴重な存在です。清國先生から本日講演していただいた先生のことを事前にお聞きしていたものですから、稲富先生とのごあいさつで開ロー番、「先生は香川大学の公開講座の象徴的存在のようですね」と申し上げてしまった次第です。そういう先生は公開講座を企画したりする者にはありがたい存在なのです。

私たちが、学内の先生方に市民の皆様の前でお話ししていただく機会として企画しているのが、資料裏面(7)のサテライト・プラザにおけるミニ講演です。これはおおむね毎月第3土曜日、2時から3時半まで、ホットな情報や話題をわかりやすく語っていただくというものです。それを契機に、翌年度に公開講座を開設してくださる先生もいらっしゃいます。また、公開講座は多くの場合、キャンパスのある金沢市内で行っていますので、金沢になかなか来られない方に対する学習機会を提供するために、(8)の事業、これは仮称なのですが学習コンテンツづくりを進め、e-learningによる公開講座、公開 e-講座的なものを今年度から徐々に試行していく予定です。

先ほど清國先生がお話しされたこのレジュメの最終ページの「知の循環型社会」のイメージ図ですが、「生活知」の下に、「情報」とあります。この情報というのを私自身は、情けの知らせというように理解しています。講座などで、講師の先生方から聞いたことで、「そうだったのか」と納得する。いい情報を知らせてもらったという意味で、私は情報というのは情けの知らせである必要があると思うのです。もちろん悲しい知らせというのも場合によってはありますけれども、本来的に情報は、知らせてくれてよかった、知ってよかった、ありがたい、力になるなというようなものなのかなという気がしています。そうした情報が、清國先生のおっしゃる科学知、専門知へととなったり、生活知となったりすると言ってよいのでしょう。科学知、専門知と生活知の循環交流によって生み出される知、それが、清國先生の「融合知」であったり「納得知」なのではないでしょうか。

こうした知を、大学と地域の方々が手を携えながら地域づくりやまちづくりに生かしていくというような意識的な取組が、地域の活性化に寄与し、ひととひと、ひとと地域、地域と地域をつなぐ、結ぶ効果、成果をもたらすことになるのではないかと、思います。

コーディネーター

そうですね。まさに今ご指摘いただいたのが循環ということだと思います。私たちはめぐりながら、より安定したところに着地するというんですか、そのように思いました。

それではこれまでの時間、皆様方にはフロアでお聴きいただいて、何かお感じになったこと、ご質問や

ご意見等がおありではないでしょうか。また香川大学へということで、限定せず皆様のご要望なども含めてご発言いただければと思っています。いかがでございましょうか。挙手をしていただければマイクを持ってまいりますので、よろしく願いいたします。

質問者 A

座ったまま失礼いたします。先ほどの阿部先生のお話ですけれども、シニアカレッジの申し込みが香川県民から誰もいなかったと伺いました。大変残念に思うし、恥ずかしいと思うんですね。それはさておいて、どういう事情で、どのような周知のされ方をなさったかというのが一つ目の質問です。それからもう一つ、日本は高齢化社会に突入しております。60歳を過ぎた人を対象に生きがいを求めるための事業として、いろいろな形があると思います。今は定年が65歳ぐらいまで延長されつつあるようですけれども、男でも80歳近くまで平均寿命が延びていますので、どのようにして生きがいを求めながら死ぬまで過ごすかというのは社会の課題ですよ。そこで、講座の具体的な中身をお考えいただけたらありがたいと思います。

コーディネーター

どうもありがとうございました。それではご指名ですので阿部先生、お願いします。

阿部

ありがとうございました。周知の方法は確かに問題がありまして反省材料なんですけれども、シニアカレッジはもともとJTBの方から話がありました。3年ほど前だったんですけども、私が経済学部長をやっていたときに、ツーリズムコースを作ろうとしていたときに、たまたまその関係でシニアカレッジをやりませんかという話があって、それに乗って、やっと3年目に実現したというものです。

昨年も実施をしたんですけども、参加者が少なくて中止になったということで、今回、今年は3回目でやっと実現にこぎ着けました。もともと滞在型の生涯学習ということで、ターゲットは県外の方に地域に来ていただきたいということを主眼にしていました。地元の方ももちろん歓迎ですけれども、そういうところに力点があって、1週間滞在して地域の店とかいろいろな人々と交流する中で、香川県とか四国のよさを感じ取ってもらいたいという趣旨だったもので、地元での周知が遅れました。

このシニアカレッジは50歳以上であればどなたでもということなんですけども、60歳以上の方により魅力的な内容のものをということで、研究していきたいと思いますが、そういうふさわしい内容ということであれば、専門家の清國先生とか浅野先生にお願いしたいと思います。

コーディネーター

いろいろ考えがあると思うんですが、例えば広島大学などはフェニックス入学といって60歳以上の方々が、学士課程でも修士課程でも博士課程でも入れるというような取り組みもしてございます。受験生や入学者が確保できるかという問題もございしますが、いろいろな形でさらに専門を深めたい気持ちは人間の自然な感情です。おそらく企業戦士として働いてこられた方々が、もう一度わが人生を振り返りながら、さらに学術的なものとも触れる機会を提供することはとても大切なことだと思います。

先ほどeラーニングの話題が出てきましたが、授業を公開するというような形も香川県の教育委員会と連携しながらやっております。そういうものの周知の方法が多少足りないかなという反省をしております。

す。今後はどしどしお知らせしながら、より多くの選択機会を提供するように頑張っていこうと思います。どうもありがとうございました。他にいかがでしょうか、後お一方ぐらいはお時間が取れそうです。はい、どうぞ。

質問者B

先生方のお話を聞いた中で、私がちょっと思ったことなんです。ちょっと質問の仕方が趣旨に添うかどうかはわかりませんが、構いませんか。

コーディネーター

どうぞおっしゃってください。

質問者B

お話を聞いている中で思い出したのは、今、日本の国が世界の中で地盤沈下しているじゃないかということ。言い方を換えれば日本が軽んじられているじゃないかと。その状況を生涯学習によって立て直しができないでしょうか。世界の中で日本がどうあるべきか、というようなことを、しっかりやっていると日本の生将来が暗いのではないかと思います。それが公開講座でできないでしょうか、と思ったわけです。

コーディネーター

ありがとうございます。国際社会の中でもっと日本の地位を高めるために大学がより大きな役割を果たすべきではないか、という意味でしょうか。公開講座を越える内容になりますが、稲富先生いかがでしょうか。いきなり振って申し訳ありませんが。先生のお立場からすると、日本人の見識を高めるために公開講座がどのように役立つのか、展望が開けるのか、先生の個人的なお考えでも結構ですのでお願いします。

稲富

それは、外国人が持っている日本観、日本人観というものが実体にそぐわないのもうちょっと評価をしてもらいたいという意味なのではないでしょうか。はっきりご質問の意味が分かりかねるのです。それとも我々自身劣等感を持たないで、もうちょっと胸を張って生きるようなそういう生き方をしようとするのか、どちらなのでしょうかね、ご質問の意味は。

質問者B

それは、私たちが日本を立て直すというような考え方をもって生きることが重要であって、このような勉強ができないか、と思うのです。自然にまかせるのではなくて、意識的に盛り上げていくと。

稲富

シェイクスピアの講座の中で、あらゆることに客観的に正しい判断力を持てるように努力しております。なるべく我々のいいところはいい、悪いところは悪いという判断を持つということが大事なわけで、それはシェイクスピアに学んで、我々の講座ではそれをやっているつもりでおりますけれども、なかなか

難しいことだと思います。

質問者B

根底には日本の未来を明るくするというのが私の願いですので、そのような観点から申し上げました。ありがとうございました。

コーディネーター

どうもありがとうございます。公開講座にも参加していただいておりますので、ぜひともシェイクスピアの講座をご受講いただいて、その中で疑問を解消していただければと思います。それではお時間も迫ってまいりました。もう一言ずつのお願いになるんですが、ご登壇いただいた3名の先生方に、私どもの生涯学習教育研究センターに対しまして、エールのような形で一言ずつご発言をいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

浅野

大学で仕事をする一人としましては、地域と学ぶ、地域から学ぶ、学びを地域へという姿勢で地域の皆さんと関わっていきたい。そのことによって知縁コミュニティを創っていきたい。知縁の知はもちろん知識の知でございますが、そういうような役割を果たしたいと思っています。北陸と四国ではありますけども、香川大学生涯学習教育研究センターさんと、またいろいろな情報交換をしながら頑張っていきたいと思っています。

もう一言だけ言わせてください。これは私の言葉ではなく、かつて朝日新聞の読者欄に掲載されていたものです。だれでも齢を重ねますが、老化という文字は老いて化けると書きます。でも化という字にくさかんむりを付けると老いて花を咲かせることになると。

老いて花を咲かせるためには4つのものが要だそうです。一つは老健、老いてなお健康、元気であるということ、2つ目は老性、これは感動、美しいものに感動するという感性と言っても良いかも知れません。三つ目が老働、老いて働くというよりはむしろ、知を地域や次代に伝える、知を継承していくこと、それがご高齢の方の役割ではないか、使命だという思いで貢献していくこと。そしてもう一つは老勉です。学び、いつまでも学び続けるという熱い思いです。この四つのある会場で紹介しましたら、独りぼっちじゃなかなかやりにくいから、老いてなおかつ友達や仲間がいた方がいいのではないか、という感想が寄せられ、その友は友でも単なる友人の友じゃなくて朋友の朋的な老朋。これで老いて花を咲かせるのではないか、ということでした。もう一遍繰り返しますと、老健、老性、老働、老勉、そして老朋と、これで高齢化社会を乗り切っていきませんか。本日はお招きいただき感謝します。ありがとうございました。

コーディネーター

では、阿部先生、お願いします。

阿部

私が最後に申し上げたいことを一つだけ挙げるとすれば、香川大学には600人を超える先生方がいます。私も先ほどのシニアカレッジで3つ半授業を聴きました。出張等で全部聴けていないんですけども、医

学部、教育学部、工学部、農学部の先生の話の初めて聴かせてもらったんですけども、本当にびっくりするほど内容の濃さに驚きました。授業も大変うまくて、この600人を超える知の蓄積をぜひ地元の皆さん方にいろいろな形で提供したいと思います。それは清國先生たちの生涯学習とも連携しながらですけれどもしたいと思います。そして、先ほどの質問に私なりに答えるならば、今、日本の社会は地方分権を必要としております。地方が元気になっていくことが日本全体の活力を増していくということで、やはり地域の人が元気で学ぶ姿勢を持つ、見識を持つ、地域を大事に考えるということだと思います。優秀な人材を育てるといふことにみんなが一致協力してやれば地方が元気になるし、日本を立て直すことになるというふうには私と考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

稲富

生涯学習にエールを送れということですが、以下の3点で現在の講座を楽しませていただいております。資格・学位取得とは無関係で試験がないというのでいいですね。それから気が向かなくなったらいつでも去れるという、これもいいですね。それから受講中に熟睡できること、これも良い。マクベスが王様を殺したときに「マクベスは睡眠を殺した」という有名な台詞を語ります。それから彼は眠れなくなって気が狂ってしまうわけです。いいことだと思っております。

私のハンドアウトを見ていただいたらと思います。最後のページ、3ページですが、ここでエールらしきものを送っております。道化フェステの詩のパロディーとして3ページの下に、これはエールになるかどうかちょっと心配ですが、書いています。「生涯学習とは何だろう、未来にあるのではなく、今の喜び、今の笑いが。未来に何が起こるか分からない、ぐずぐずしていいことはない。さあ、すぐ始めよう生涯学習。人生は長く続かないのだから。」あまりエールになっていないと思いますが。

一つだけ最後に、コンビニでも今どういう商品が売れるか、どういう商品がみんなに求められているかって絶えず研究しているらしいですね。押し付けにならないで、循環型になるためには、一般の社会の方々はどういうものを求めておられるか、それをいつも敏感に察知する必要があるのではないかと思うんですね、循環型の知を確立するためには。以上です。ありがとうございました。

コーディネーター

シンポジストの皆様方、どうもありがとうございました。またご聴講いただきました皆様方には重ねてお礼を申し上げます。変化の激しい社会で、その中で価値自体も浮遊しているわけですが、だからこそ大学が足元を固めて価値を創り出していかなければならないと思っております。

当センターも30年経過いたしました。皆様方には今後も当センターをしっかりとご支援いただきつつ、さらに私たちもより身近に感じていただけるセンターになるように努力していきたいと思っております。本日のこの講演会とシンポジウムにご参加いただきまして、大変ありがとうございました。閉会のご挨拶も兼ねて本日の全日程をこれにて終了させていただきます。皆様どうぞお気を付けてお帰りくださいませ。